

駒沢大学外国語部創設10周年を迎えて

外国語部長 栗原万修

私たち外国語担当教員が文学部より分離・独立して外国語部が創設されてから、すでに10年になろうとしている。光陰矢のごとしというが、まことに歳月の過ぎるのは早いものである。10年というひと区切りの歳月が無事に経過したことについては、すなおに慶びたいと思う。

むろん新たに外国語部が創設され、他学部と同じように教授会を構成して、部予算をもち、人事権を確保するにいたるには、それだけの理由があるわけだが、やはり10数年前の学園紛争との関連なしに考えることはできないであろう。

「100年遅れの明治維新」と新聞でいわれたわが駒大での学園紛争を契機として、当時の非近代的、非民主的な大学運営に対する批判は高まり、学内における新しい改革への気運は日毎に増大していった。教員サイドでいえば、その改革の推進力のひとつとして外国語部教員が果たした役割もまた決して小さくなかったはずである。当時、外国語担当教員はすべて文学部に所属し、さらにそのなかで「語学専任教員会」なる組織に結集して、学内民主化のため努力していた。

幸い学園紛争も落ちつき、当局は約束に従って学内の一定の民主化にふみ切ることになった。全学の教授のみで構成されていた連合教授会は解散され、各学部教授会が専任講師以上を構成員として正

式に発足した。学部長の公選もそのときはじめて実現した。それを皮切りに学内の諸制度，諸組織が改革され整備されていったが，外国語部の創設も，いわばその改革の延長線上にあったわけである。

その間の事情については吾妻雄次郎教授が後でくわしく説明されるであろうから，そこにゆずりたいと思うが，ともあれ現在，外国語部には英語，ドイツ語，フランス語，中国語，スペイン語，そしてロシア語を担当する専任教員40名が所属している。内訳は，英語科20名，ドイツ語科7名，フランス語科7名，中国語科3名，スペイン語科2名，ロシア語科1名である。非常勤講師数との比率のバランス是正が当面の外国語部の大きな課題のひとつである。

おそらく，これから先の大学教育は今までのような安易な運営ではいずれ行きづまるときがくるのではないだろうか。すでに大学進学率が下降しはじめたという新聞報道を待つまでもなく，社会そのものが実力主義へと移行していくなれば，当然，本当の実力を身につけたいと願う学生だけが進学してくる時代がやってくるであろう。そのときになってから慌てても遅い。日頃から設備や環境を整備し，カリキュラムや教員スタッフを充実させて，真に学生たちを惹きつける魅力ある大学となるよう努力していかないかぎり，少なくともよい大学として生き残ることはむずかしくなるであろう。

これから先，私たちの外国語部はできうるかぎり内容を充実させて，決して他大学に負けぬよう，駒沢大学の語学教育のため全力を尽していく所存である。あるいは，さらに時代に即応した新しい組織へと衣がえをしていくことになるかもしれないが，いずれにせよ創設10周年を祝してこの度の「記念論文集」を刊行するにあたり，駒沢大学の発展と同様，これから10年後，20年後の外国語部の発展をも心から祈りたいと思う。

(1981年10月記)